

英語教育における訳読教授法の功罪および その効果的活用に関する一考察

A Discussion on the Merits and Demerits
of Grammar Translation Method
and the Effective Practical Usage

早田 武四郎 (和歌山大学 教育学部 英語教室)

Takeshiro SODA (Department of English, the Faculty
of Education, Wakayama University)

加澤 恒雄 (広島工業大学 工学部 英語教室)

Tsuneo KAZAWA (Department of English, the Faculty of
Engineering, Hiroshima Institute of Technology)

抄 録

英語教育における訳読教授法の弊害はよく議論されることであるが、その歴史や背景、効果的活用法については、あまり聞かれない。小池生夫他編「大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究 (I) — 教員の立場 —」によると、大学英語教育において7割、高校英語教育において5割、中学英語教育において2割弱、訳読教授法が採られている。1991年7月、大学設置基準が改訂されて以来、大学教育におけるカリキュラムや授業方法の改善に向けた努力は全国的なうねりとなっている。高校英語教育も大学入試の改善によって、望ましい方向に変わっていくであろう。しかし、今なお、大学、高校において、訳読教授法による授業の比率は高いと考えられる。このような現状の中で、訳読教授法の効果的な活用について考察する。

キーワード：訳読教授法、伝統的訳読教授法、様々な教授法、効果的訳読教授法、言語習得理論

1. はじめに

わが国で英語教育がスタートして以来、訳読教授法はその中心的役割を果たしてきた。日本の文化水準が低く英米等の先進国から学ぶことが多かった時代では訳読による教授もそれなりの意義があった。すなわち、先進国の文化を文献を読んで学びとることが基本であり、また、学生も興国の意気に燃え、新鮮な興味と旺盛な知識欲で英語を学習していたであろうし、おそらく知能の優れた優秀な若者が英語を学んでいたために、プラスの相乗効果もあり、訳読教授法も相応の任務を果たしたと思われる。第2次世界大戦終了と同時

にアメリカ軍が進駐し、他の外国人も入って来て日本人も外国人と英語で会話する必要性が高くなった。この頃から、日本の学校英語教育の非実用性が指摘され始めた。つまり、先進国から学べると同時に外国人と英語でコミュニケーションできることの両面が求められるようになったのである。明治以来、主体的に行われてきた訳読教授法はその長所のみを残して改善することが求められている。

2. 訳読教授法の歴史

文法規則を翻訳（訳読）の基礎とするため、文法的教授法（Grammar Method）あるいは、文法訳読教授法（Grammar Translation Method）とも呼ばれる。この教授法は必要に応じて自然発生的に生まれ、昔から伝統的に使われて来たので伝統的教授法（Traditional Method）とも称される。その源はギリシャ語、ラテン語などのいわゆる古典語の学習から発したと考えられる。17世紀までのヨーロッパの教育は、中世的学校教育の時代であって権威に基づく知識注入が主体を占めるスコラ哲学の時代であった。したがって、学問の中心が古典語におかれ、難解なものを解明し理解することが教養と考えられていた。文法が特に重視され、言語のための学習というより文法そのものが学習の対象となり、複雑な規則によって古典語を翻訳することが、精神陶冶や理性的判断力の育成に効果があると考えられていた。この文法偏重主義がそのまま無批判、無自覚に現代の外国語の教授に適用されたのが訳読教授法といえる。

3. 訳読教授法の長所

以下に訳読教授法の長所について挙げる。

- 1) 読むことを通じて、文脈の中で語彙の増強が図れる。（読まないことには英語力はつかないという説があるが、これは、この点に関わっていると思われる。）
- 2) 文法事項の絶えざる復習の機会が与えられる。
- 3) 教師の側からいえば、授業の手間がかからず、長続きする。
- 4) 文学等の専門科目等で有効である。
- 5) 思考力を増進する。（という説がある。しかし、実験によって検証されたとは聞いていない。）
- 6) 題材選択を誤らなければ、特に上級の学習者の知的欲求に応えることができる。
- 7) 語彙力増強を通して、リスニング力の養成に間接的に役立つ。1)と関連する。
（タイム等の雑誌を支障なく読める語彙力があれば、英語国のネイティブ・スピーカーがナチュラル・スピードで話すことが聞き取れると言われている。）
- 8) 論文執筆に際しての海外文献の調査、大学院入試、外交官試験等の準備を兼ねることができる。
- 9) 外国の優れた文化、思想、アイデア等を直接、吸収する学力の基礎を養成することができる。
- 10) 英語を学習する場合、中心となるのはリーディングの中の精読（訳読）である。
これを柱にリーディングの中の速読（多読）からライティング（ディクテーション、

作文etc.) , リスニング, スピーキング (スピーチ, ディベートetc.) へと配置されるのが一般的である。

4. 訳読教授法の短所

次に訳読教授法の短所について挙げる。

- 1) 伝統文法を中心におく。原則的な文法規則とその例外を生徒に記憶させる。
- 2) 指導は演繹的に進められる。
- 3) テキストを読む場合, 文法規則や例外の実例を抽出することに重点がおかれ, 抽出された実例は文法規則の暗記を補強する材料として取り扱われる。
- 4) 作文を重要な学習作業とするが, これも文法規則の適用が目標であり, 英語の慣用性は無視される。
- 5) 翻訳を重視するので母国語の表現に神経質になる。
- 6) 音声面が軽視され, 個々の単語の発音以外は文として音調, リズムなどについてほとんど指導は行われない。
- 7) 口頭作業による句型練習や英語による対話は全く無視される。
- 8) 生徒の英語に対する興味, 関心のあり方が偏る。学習の精力を理解面だけに片寄って使うため, 正常なものでは満足できなくなり, 異常なもの, 例外的なものを好んで求めるようになる。

5. 訳読教授法に対する反動として生まれた教授法

1) Natural Method (自然的教授法)

a. 定義 ヨーロッパで19世紀の後半まで行われてきた訳読教授法 (Translation Method) に対する反動として現れた最初の教授法であり, 系統的・科学的な発音指導ではないが, 音声面の指導に重点がおかれた。耳と口による会話を強調したため, 会話的教授法 (Conversational Method) とも呼ばれている。この背景となる理論は教育哲学における自然主義 (Naturalism) で外国語の学習を幼児が母国語を覚えるのと同様に, 自然な過程に置こうとしたのである。この教授法の主唱者はフランス人のGouin (グアン) とドイツ生まれの米国人Berlitz (ベルリッツ) の2人である。両者はこの教授法の協同主唱者ではないが, ほぼ期を同じくして同じ様な教授法を考えるに至ったもので, 一般にGouinによって始められたNatural Methodをグアン式教授法 (心理学的教授法とも呼ばれる), Berlitzの提唱したNatural Methodをベルリッツ式教授法と呼んでいる。両者は少し違うところもあるが, 共通した特徴は以下のようなものである。

b. 特徴

- (1) 授業には外国語を使用して母国語は全く使わない。母国語はできる限り生徒の頭から開放しようとする。翻訳は一切しない。
- (2) 教材は教師が自分で何回も言って聞かせることによって提示し, 生徒に十分真似させてから易から難の順で教師と生徒間で問答を行う。

- (3)教材提示の補助としては、実物・絵・ジェスチャー・パントマイムを多く取入れ、それらを十分に活用しながら、母国語による語・句の意味は全く与えずに何とか外国語の表す意味内容を理解させる。新出語は既習語によって説明する。
- (4)発音は教師の模倣によってのみ学習し、発音記号は使用しない。
- (5)外国語による話し言葉としての表現にかなり習熟するまでは、生徒に印刷された文字を見せない。
- (6)文法は口頭作業 (oral work) の過程において実例の中から帰納的に習得させ、系統的な文法指導は最終段階まで保留する。
- (7)作文は口頭作業により、十分練習した語句の再生・確認の意味で与える。

アメリカの12人委員会の報告 (Report of the Committee of Twelve) によると、この教授法は指導法というよりも、むしろ外国語教授上の重要な原理であると言っている。しかし、この教授法も教授法として、定着するための詰めを怠ったために、非常に良い点を持ちながら、直接教授法 (Direct Method) や口頭教授法 (Oral Method) のような強い支持を受けるに至らなかった。欠点として、発音の正確さより流暢さを重んじ、とにかく話せばよい、分かればよいとしたことや、母国語学習と外国語学習の決定的な相違を無視して、幼児の母国語習得の過程をそのまま成人に当てはめようとした点である。幼児は模倣・記憶に優れているのに対して、成人は、それに代わるものとして比較・推理・総合・分析・判断の能力を備えている。成人のこの能力を無視し、弱化している能力を活用しようとするのは合理的ではない。

2) Direct Method (直接的教授法)

a. 定義

外国語の教授において、母国語の仲介なしに直接外国語を通して、外国語を学習させる教授法をいう。20世紀の初頭、それまで長年の間行われてきた訳読教授法 (Translation Method) に対する反動として現れた音声重視の革新的な教授法の総称であって、創始者を特定することは難しい教授法である。したがって、その名称も新教授法 (New Method)、音声中心教授法 (Phonetic Method)、革新教授法 (Reformed Method) と呼ばれる場合もある。直接教授法の胎動が始まったのは19世紀の後半に入ってからである。

ドイツのWilhelm Vietor(1850-1918)が1882年発表した外国語教授法に関する小論文、Der Sprachunterricht muss umkehren(=The Teaching of language must be started afresh)が直接教授法誕生の契機となった。

b. 特徴

- (1)発音指導の徹底。
- (2)反復音読の重視。
- (3)読書材料に則した文法の帰納的指導。
- (4)外国語を通じての直読直解を強調する。
- (5)外国語を学習するには、その外国語に特有の語感を養うことが大切であり、それは経験と表現の直接連合 (direct association) によって形づくられるものであるという理論に立っている。経験と表現の間には何物も介在させないという信念から、学習者の母国

- 語を排除する。特に提示される外国語の意味を理解するために、学習者の母国語が使用されることを認めない。また、外国語を母国語で説明した二カ国語辞典は使用はしない。
- (6)学習の過程は自然性を重んじ、母国語を習得した過程に準じて外国語を学習する。つまり、言葉聞き・話し・読み・書く順序で学習する。「単語」を学習の単位としないで、少なくとも表現しようとする場の内容を伝えるに足るだけの「文」、または「句」を単位として学習する。
- (7)学習活動としては、逐語訳または翻訳に類する作業は一切行わない。新しい語句や表現を理解させるためには、実物や絵などを提示する直示的方法、動作、身振り、あるいは既習語彙、既習構文からの類推などを定石的な指導技術として使用する。
- (8)学習活動としては、英問英答形式による口頭作業が主となるが、目標は読むことであって読みの材料の内容を十分に理解しながら読める段階に到達する過程として、英問英答が行われる。
- (9)発音指導が重視され、発音記号を駆使して系統的な訓練を行う。普通の綴り字よりも先に発音記号を指導することが多い。
- (10)文法は帰納的な方法によって指導される。できる限り口頭作業に提示される言語材料を通して、そこに共通して現れる文法的特徴を学習者自身が帰納的に一般化することを目標とする。少なくとも文法指導のための特別な時間は設けない。
- (11)テキストには物語中心の読物が使われることが多いが、予習は原則として否定する。

e. 短所

- (1)経験と表現の直接連合を指導原理としているが、ある一つの言語の音組織・文構造について母国語として習熟している者にとって、完全に母国語の介在なしに他の言語でものを考えることは心理学的に不可能である。したがって、この指導原理は仮定であり、学習のための要領として扱われるべきである。
- (2)学習活動から翻訳的作業を排除したことは理解できるが、教室における母国語の使用を一切禁止することには疑問がある。特に、非具象的な事物や抽象的な観念を外国語で説明することは、理解が皮相的なものにとどまるばかりでなく誤解が生ずる危険性が多い。
- (3)学習活動の主体が英問英答になることは、生徒が常に教師の質問を受けて答える形となり、教師と生徒の話す量が均等である。また、教師が新教材の意味内容を外国語によって理解させることのみを腐心して、その話す量が少なくなる傾向がある。これが直接教授法の最大の弱点と考えられるもので、生徒の受容面は向上しても発表面に欠ける傾向が現れる。
- (4)英問英答は基本的な文構造を定着させるための重要な学習活動としてではなく、教材の意味内容を理解させる手段として使われるため、質問の形式が安直なものとなり、一定の型に陥る傾向が強い。
- (5)文法を帰納的に把握させるという原理は正しいが、英問英答の形式で把握の度合を測定することは困難である。

3) Oral Method (口頭教授法)

a. 定義

Palmerの唱道した口頭作業 (oral work) 重視の教授法である。19世紀まで外国語教授の主流をなしていた文法・訳読教授法が教育方法的にも学習心理的にも矛盾や欠陥の多いものであり、外国語学習の原理に反することから、それに対する反動として20世紀の初めからGouinやBerlitzの主唱した自然的教授法(Natural Method)のように、音声言語(speech)としての外国語の学習を強調し、学習の過程から母国語を完全に排除して、直接その外国語を通して学習させようとする教授法が現れた。(Gouin Method, Berlitz Method)

b. 特徴

(1)言語観

Palmerはスイスの言語学者Ferdinand de Saussure(1875-1913)の言語観に強い影響を受け、言語を「規範としての言語」と「運用としての言語」に大別し、外国語学習の対象とするものは、後者の「運用としての言語」であるとした。さらに、Palmerは「運用としての言語」の持つ4つの領域のうち、聞く、話すを第1次伝達、読む、書くを第2次伝達に分け、学習上は第1次伝達が優先されるべきだと主張した。したがって、Oral Method (口頭教授法)では音声第1主義が採られている。

(2)原理

言語の習得は「知識」ではなく、習慣としての「技能」であることが強調され、習慣形成のための反復練習が必要と説かれている。そして、言語を習得するために不可欠な言語習慣として次の5つを挙げている。(i)耳でよく聞き分けること、(ii)耳で正確に聞いたことを、口で正確にまねること、(iii)正確にまねたことをよどみなく言えるようになること、(iv)言えると同時に意味を理解し、意味を思い浮かべると同時に、それを言葉として言えるようになること、(v)朗読と意味が一体となった状態で無意識的に言えるようになった文を基礎にして、置き換えや転換によって類似文例を作りだせるようになること。

(3)方法

口頭教授法は音声面と同時に場面を重視する教授法である。したがって、指導は実物・絵・動作などによって常に直示的、実演的である。学習言語材料について常に生徒に現実感を持たせながら、新教材の提示、および説明を行う。母国語の翻訳による観念的な理解はできる限り避ける。

(4)指導技術

口頭練習の中心的な学習活動として、英問英答を採用する。口頭教授法による英問英答は任意の言語材料によって日常会話的な応答を行うのではなく、あらかじめ設定された文型を定着させる指導技術として使われるもので、そのためには指導目標となる文型に基づいて、そこから派生した文例によって組み立てられた定型会話を通じて行われる。この定型会話の考案が口頭教授法の一大特色をなしている。その他に授業の進行に変化を与えるものとして、命令訓練および自然な学習心理を応用した技術としての動作連鎖が用意されている。

(5)長所

(i)発話を刺激する場面を重視し、実物提示・実演・動作などにより英語を現実にして教えることが、学習心理の面から見ても当を得ている。

(ii)入門期の指導に際し、口頭作業を他の作業に優先させ集中的に行うために、英語の音

組織に早く慣れる一方、読むことや書くことの作業と併行して行う場合に比べると、それだけ生徒の学習負担が軽減される。中学1、2年の段階では一般に聴覚的であり、発表を好む傾向が強いので、学習の興味を持続させるのに容易である。

- (iii) 英語の4技能のうち、特に聞くこと的能力を養成するには効果は大である。
- (iv) 文法指導については帰納的な取扱いを強調し、聞き話し読み書く作業の中に含ませて取り扱っているので、文法そのものの学習が精神・頭脳の陶冶になると考えるような古い教育観から、英語教育を脱却させる功績があった。

(6) 短所

- (i) 口頭教授法は、いわゆる直接教授法と違って、教室での日本語の使用を禁じていないが、できる限り直接英語を通して理解させるように、指導が行われる。その結果、口頭導入や説明の段階において生徒の理解が上すべりするきらいがあり、また簡単なことへの説明にも多くの時間を必要とし、授業の進度を遅らせる場合もある。
- (ii) 授業におけるほとんどの学習活動が口頭作業に終始する傾向があるので、1単位時間における四技能の訓練のバランスに歪みを生じ、聞くこと・話すことの技能に比して他の技能に対する生徒の関心が薄くなり、特に何らかの指導的措置を講じない場合には、書くことの技能が低下することがある。
- (iii) 口頭作業が主として英問英答の形で行われるので、教師が発問し生徒が答えるという一方的な学習形態となり、発表 (production) も聞いたことを答えの形に換えて発表するにとどまるので、いわば一種の再生 (reproduction) であり、生徒の主体的な発表とは言えない場合が多くなる。
- (iv) 英語による口頭導入、口頭説明および英問英答など教師の話す時間が多くなり、それだけ生徒の話す時間を少なくする傾向がある。したがって生徒の練習量が減り、その反面、教師の疲労度は高くなる。
- (v) 教師の話す能力に過大の期待がかけられる。口頭練習が多いだけに教師の話す能力あるいは発音について正確な知識・技能が不足している場合、不適切な英語を反復練習によって生徒に定着させ、将来の学習に大きな支障をきたす場合もでてくる。
- (vi) 入門期のオリエンテーション (No-text period) は口頭のみによる6週間の指導を定石として取るが、この期間にPalmerのいう6週間を取ることは、現在の日本の中学校におけるテキストの質量を考えると不可能である。また、夏休み近くまで流動的な口頭のみによる学習に授業を抑え、学習事項の確認および記憶の手がかりとしての文字を全く使わないことは不利である。生徒も第4週あたりから早く文字に入ることを希望する傾向があるので、それを無視して口頭だけで授業を強行することは、教師の確固たる信念と適切な指導計画がないかぎり、生徒の興味と関心を重視する口頭教授法の主旨に反する。

4) Eclectic Method (折衷教授法)

a. 定義

Reading Method (読書中心教授法) と称されるもので、外国語学習の目的を読む作業、特に黙読、多読、速読においた教授法である。したがって、文法や翻訳に中心をおき、精読を主な目的とする訳読教授法とは一線を画しているわけで、文法や逐語的な翻訳を軽視

し、できるだけ速い時間で多くのものを読み、文章の形態などにとらわれず、その中に盛られた意味内容・思想を把握する。つまり直読直解をねらいとする。

訳読教授法 (Translation Method) と直接教授法 (Direct Method) を折衷した教授法であり、特定の提唱者はない。19世紀後半まで長い年月の間、欧米で外国語教授法の主流をなしていた訳読教授法に対する反動として、19世紀末に至って音声重視の革新的な教授法が次々に現れた。20世紀に入ってからは、それらを統合・整理したものとして、外国語を直接外国語を通して教授することを主眼とする直接教授法が理想的な教授法として欧米各国の教育界から強い支持を受けるようになった。

しかし、実際の指導の場においては、直接教授法で授業を一貫することに、かなりの支障が現れる一方、旧式とされた文法・訳読中心教授法にも捨てがたい長所もあり、実利的な面では両者の折衷が必要となった。特に米国においては、直接教授法から折衷教授法 (読書中心教授法) への推移が顕著である。

Charles H. Handschin, (Modern Language Teaching (World Book Co., 1940) は推移の理由として次のような点を挙げている。

(i) 母国語の使用を完全に排除しようとする直接教授法の行き方に対して、一般教師の側の訓練が不十分であること。(ii) 直接教授法を全面实施するためには授業時数が不足していること。(iii) 直接教授法を有効にするための教科書が完備していないこと。(iv) 上級学校の入学試験などは依然として文法・訳読中心教授法に基づいた問題が出されること。(v) 話し言葉の学習が書き言葉の学習よりも難しいこと。(vi) 外国との貿易などは英語ですべて事足りるので、実務上、外国語を話す能力を必要としないこと。(vii) したがって、直接教授法のねらう聞き・話し・読み・書くの円満な習熟は、大部分の生徒・学生にとって時間と労力の無駄であること。

以上の理由から米国では折衷法として、外国語学習の主目標を読むことにおくが、ただし、言語感覚を養うために直接教授法方式による口頭練習を取り入れた、と Handschin は述べている。

b. 特徴

- (i) 入門期から reading を取り上げ、次第に視覚域 (eye-span) を伸ばすことによって、一瞥して文章の意味を読み取ることに慣れさせる。(sight reading)
- (ii) 文法は読む作業の補助として取扱い、それも必須事項だけに限る。時としては簡単なテキストも併用する。文法は主として読みの材料の中に現れたものから帰納的につかませる。
- (iii) 音声面は軽く取り扱われて、口頭作業はほとんど、あるいは全然行われない。
- (iv) その反面、外国語学習の究極の目標として、母国語の介入なしに外国語がその母国語話者 (native speaker) 同様、速く読むことができるようになるために速読による多読を重視する。

c. 長所

- (i) 比較的短期間に外国文学が読めるようになり、味読までは行かないが、少なくとも意味が取れるようになる。

- (ii)間接的には外国語の学習を通して母国語の語彙意識を増し、母国語と外国語との類似点や相違点に注意することにより言語感覚が鍛えられる。したがって、母国語の文体も良くなる。
- (iii)ことに外国語の文と、その文の表す適切な意味内容とを結び付ける作業が判断力の鍛錬となる。

d. 短所

- (i)授業に活気がなくなり、生徒に対して注意力を維持させる刺激が乏しくなる。したがって、いわゆる真面目な生徒だけに向けた授業となる。
- (ii)この教授法は指導が容易で方法的に特別な予備訓練を必要としないので、長年この方法ばかり続けていると教師の質が低下し、自己研さんの意欲がなくなり、怠惰で現状維持に満足するような人間になる恐れがある。
- (iii)音声を全く等閑視していること。
- (iv)黙読・速読に支障をきたす要因として眼球運動の停留時間 (eye-fixation interval) の延長だけを取り上げ、それを筋肉運動的にだけ解決しようとしている点は、言語学習および心理学の原理から見ても矛盾していること。
この教授法は漸次改良を加えながら、第2次大戦までほとんど米国における外国語教授法を代表するものとなっていた。
また、現在、わが国の高等学校の段階（中学校を口頭重視の準備段階とみて）において有効に適応される多くの示唆を含んでいると思われる。

6. 訳読教授法を効果的にするための方策

以下に訳読教授法が授業の中で生きる方策について提案する。

- 1) 学習者にとって、親近性（必要性和好感性）の高い題材 (Authentic Materials) を選ぶ。
- 2) インターラクティブ・リーディング（著者と対話しながら読む）を心がける。
- 3) 1頁ごとに3, 4問の正誤問題を配置する。
- 4) スキーマ理論をテキスト作成に生かす。
（スキーマ理論とは、読む前に学習者の題材についての背景知識 (schema) を掘り起こす質問を個人的な関心→常識的知識→背景的知識と段階を踏んで行い、題材について強い関心を学習者に持たせた上で、読ませるリーディングの指導法である。この理論をテキスト作成に生かすということは、題材についての質問を予めテキストに配しておくか、教師用マニュアルに記載しておくか、することである。）
- 5) テキスト作成にあたり、タイトル、サブタイトル、大意文（英語、日本語）、単一画（頁1枚の絵）、文脈画（課の中の文脈に1枚の絵）を有効に生かす。
- 6) 速読、リスニング用に使えるよう、課ごとに（1頁が望ましい）語数と正誤問題を配置する。その中にヒアリング・テストの問題、ディクテーションの問題を入れる。
- 7) できれば、ビデオ・テープを用意し、その課の説明や次の課の紹介、ヒアリング・テスト、速読一、正誤問題、ディクテーションおよびそれらの答を入れる。

- 8) 授業の中に題材を朗読させる段階を入れる。
- 9) 同じく、授業の中に朗読した題材を暗唱させるプロセスを入れる。
- 10) 4月当初に小グループを編成し、課ごとにイラストを配したヒアリング・テスト問題を作成する課題を与える。
- 11) シナリオになっている課は、同じく、小グループごとに、約2カ月間の時間を与えた上で実演させる課題を与える。
- 12) Krashen, S.らが唱道するインプット理論を授業に生かすこと。例えば、授業では小時間でもテープを聞かせることを励行する。また、テキスト（他の題材でも可）をウォークマン等で聞くことを課題として与える。
- 13) 授業で学習者の学力や学びたい事項・技能を調査し、訳読教授法の使用についてはクラスの現状に合わせる。
〔調査の結果、学習者の学力が中級（中）～上級であれば精読（訳読）を希望する場合もあるので留意しなければならない。〕

7. 結 び

以上、訳読教授法の歴史、訳読教授法に対する反動として生まれた様々な教授法、さらに、それらの教授法に対する批判として生まれた教授法を概観し、訳読教授法を効果的に活用するための方策について述べた。最後に、わが国英語教育の訳読教授法の改善に向けて提言をしたい。

筆者らは、上記、折衷式教授法（読書中心教授法）に音声面を加味し、6で提案した13項目を生かしたテキストを、大学においては、できれば、一般英語担当の教員が、高校では市・郡や県が中心となって、作成し、個々の英語授業で活用することが、現状ではベストだと考える。斯界の先達の御批判、御助言をいただければ幸甚である。

引用・参考文献

- Ann, Malamah—Thomas, classroom Interaction, Oxford University Press, 1991.
- Brown, H. D. 著, 阿部・田中共訳『英語教授法の基礎理論』金星堂 1983.
- Ellis, R., Understanding Second Language Acquisition, Oxford University Press, 1992.
- Finocchiaro, M. 著, 谷田部・黒田 共訳『英語教授法』金星堂 1973.
- Howatt, A. P. R. A, History of English Language Teaching, Oxford University Press, 1991.
- Hubbard et al., A Training Course for TEFL, Oxford University Press, 1991.
- 伊藤 嘉一 『英語教授法のすべて』第3版 大修館書店 1987.
- 加澤 恒雄 「教授＝学習法の研究」『私学研修』126号 pp.71—86 1992.
- 小池 生夫 他編 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（I）』
— 教員の立場— 昭和56・57年度文部省科学研究費補助金研究
成果報告書 1993.

- 小川 芳夫 他編『英語教授法辞典』 新版 三省堂 1991.
- Rivers, W.M., Interactive Language Teaching, Cambridge University Press, 1988.
- 斉藤 誠毅 「スキーマ理論と読解能力」『英語教育』平成4年 12月号 pp.14-16,
大修館書店 1992.
- 早田 武四郎他「文学教材における訳読式教授法とリスニング・速読教授法の比較実験」
『読書科学』第37巻 第1号 pp.1-10 1993.
- 安井 稔 『英語学と英語教育』 開拓社 1988.